

『本朝二十不孝』研究史ノート（一）

有働 裕

序、「悪」の造形とリアリズム

荒五郎の女房

室町時代物語『三人法師』を読み返すたびに、この物語に登場する盗賊荒五郎の女房には妙な魅力を感じる。

十三の歳から三百八十余人を切り殺してきたという三条の荒五郎は、積年の悪因がわざわざいしてか、近頃はさつぱり稼業がうまくいかない。妻子の困窮を見るに見かね、また、妻に激しく愚痴られて、今日こそはと決意してたそがれ時の都の街角に潜んでいた。折りよく下女を二人連れた「あたりもかゞやくほどの上臈」が通りかかったので、荒五郎は命乞いをするのも聞かず刺し殺し、小袖や肌着などを剥いで持ち帰る。

それらを荒五郎が女房に見せたところ、女房は「かほどの装束着給ふ女房の、年も若くこそ御わたりあるらん。いくつばかりの人ぞ」と尋ねる。荒五郎は、「情をも知りて問ふぞ」――さ

すがに殺された上臈を哀れんでいるのか、とばかり思い、「夜目に見つれども今二十二、三まではよもなり給はじ。十八、九の人なり」と教える。

これを聞いた女房は、あわてて外へ飛び出して行き、しばらくして戻ってくると、荒五郎に次のように言う。

「あらいかにと御身は、大名にて候ものかな。とても罪つくるならば、少しも徳（得）のあるやうにはさせ給はで。現在わらは行きて、髪を切り取りたり。是程の髪こそなけれ。かづらにひねり候べし。小袖にはかへべからず」とて、茶碗に湯をうめて、振りす、ぎ竿に掛け、干し、踊りはねうれしがり喜ぶ事限りなし。「さても女の宝まふけたり、あらうれしや」と申し候ひし、

若い女の死体から髪の毛を切り取ってきて、それを洗いつつ狂喜乱舞するこの女房の姿は、単に残酷だけでなく、中世の下層社会を生き抜くたくましい人間像を伝えてくれる。これまでに三百人以上の人を殺しながら、この女房の姿を見て「あらあ

さまじや」と感じ、にわかに出家してしまう荒五郎よりも、むしろ凄みを感じさせるといつてよい。善悪の規準を超えたところで、読むものを思わず惹きつける力を持っている。

「誤読」の可能性

もちろん、この作品はそのような魅力的な「煩惱＝悪」の姿を描き出したものだ、ととらえることが、現代人の感覚を通しての身勝手な「誤読」であることを私は十分に承知している。この物語は、高野山で偶然に出会った三人の半出家の僧が、互いの過去の懺悔話をし、最後にはより一層の精進の決意を固めるというものである。俗世を厭い煩惱を捨て去った発心の尊さがテーマであることは、言うまでもない。この女房の描写にしても、それを見た荒五郎の「かゝる女に枕を並べ、契りを結びし事こそ、返すぐもくやしけれ。あらあさましの女の心や」という感想を引き出し、「是を菩提心の善知識として、髻を切りて、此上臍の跡をとぶらひ、又我身の菩提をも願ひ候はん」という決意を導き出すための契機としてふさわしいように、より誇張して描いたものであろう。この物語の素材となったとされる『沙石集』巻十の「悪を縁として発心したる事」の記述が、血付たる小袖共を、「これこそ、しかくゝの事してまうけたれ」とて、妻にとらせければ、「さこそ云しかども、かわゆき事かな」なども云べきに、えみまげて、よに嬉げなる顔気色也。あまりにうとましく覚へければ

と簡略なものであるのと比較すれば、『三人法師』の作者がいかに印象深い物語に仕立て直すことに成功したか、その力量を十分に感じ取ることができる。

このように、女房の姿を現世の煩惱の象徴、批判されるべき悪として意識して作者が描いたことを一〇〇パーセント確信し、また、当時の読者も当然それを素直に受け入れる読者であったはずだと認めながらも、現代の一読者としての私は、仏罰などいっこうに恐れる様子もなく「生きる」ことへの一途な執着を見せる人間像に、言い表し難い凄みと存在感を感じてしまう。もちろん、好感や爽快感を感じるというわけではないが、この物語の主人公格である三人の法師を押しつけて、その「生きていく」姿が印象に残ってしまうのである。三人の法師の気持ちが一致していく求心的構成が見事で、いささか奇麗過ぎるほど破綻なくまとまった物語であるだけに、この女房の煩惱にまみれた様子が際立ってくるように思われる。この物語が今日でも面白く読める理由の一つには、そのような「誤読」を許容するテクストであるということが含まれているはずである。

当然のことながら、これは読者の側の問題である。「文学作品」として読む際の、ありきたりの発心譚に収まりきらない部分でできるだけ見出したという姿勢、特定の「主題」に収斂させて納得するよりも描写そのものの面白さに固執してみたいという意識の所産にはかならない。要は、コンテクストの変容により同一の作品から異なった意味が引き出されるようになって

たまでで、テキストが読者とかかわりの中で生産性を生ずるものである以上、当然の現象である。それゆえに、なぜ現代の読者がそのように受け止めてしまうのか、どのような叙述がそのような読み方を生み出すのか、といったこともまた研究対象たりえると考えられる。

『本朝二十不孝』のリアリズム

いささか唐突ではあるが、では、西鶴の『本朝二十不孝』の場合はどうだろうか、と考えてみたい。周知の通り、志賀直哉の『暗夜行路』の中に次のような一節がある。

彼は二三日前、お茶から日本の小説家では何といふ人が偉いんですか、ときかれた時、西鶴といふ人ですと答へた。さういつたのは、丁度その前読んだ二十不孝の最初の二つに彼は悉く感服して居たからであつた。それは余りにと云ふ程徹底してゐた。病的といふ方が本統かも知れない。彼は若し自分が書くとなれば、あ、無反省に残酷な気持ちを押し通して行く事は、如何に作り物としても出来ないかと考へた。親不孝の条件になる事を並べて、書く事は出来るとしても、それをあの強いリズムで一貫さす事は却々出来る事ではないと思つた。(中略)で、実際西鶴には変な図太さがある。

リアリズム重視のこのような解釈は、悪に対する徹底した観照的態度といった表現に言い換えられつつ、今日まで命脈を保

つているといえよう。もちろん、あくまでも登場人物時任謙作の述懐であるのだが、志賀直哉の『本朝二十不孝』観としてこの一節はこれまでしばしば言及されてきた。

暉峻康隆氏は、この作品での西鶴の無感傷性―図太さは、西鶴自身の個性というよりも上昇期の元禄上方町人の「非情なる説話的精神」が発揮されたものであり、そこに志賀直哉自身が自らの精神との類似を見出したにすぎないとする(注1)。また、野間光辰氏も「直哉の買被りである。西鶴には直哉ほどの図太さはない。一見非情・非人間的と見えるのは、西鶴の咄の姿勢がそうさせるのである」(注2)と否定的見解を述べた。とはいふものの、谷脇理史氏の「現在までの批判は、『暗夜行路』の批評の欠陥を指摘してはいても、されば『二十不孝』をどう評価して行くべきかという点では、『暗夜行路』のそれとほとんど相違がない」(注3)という指摘は的を得たものであろう。そして、それらリアリズム重視の発想へのアンチテーゼとして谷脇氏の『本朝二十不孝』「戯作」説(注4)が発表されると、それをふまえた論が数多く書かれるようになった。それでも、研究史上の各論文を丹念にたどってみれば、『暗夜行路』的な評価は脈々と生き続けているように思われる。

つまるところ、『本朝二十不孝』という作品から「無反省に残酷な気持ちを押し通していく」という感想が生まれるメカニズムとはどのようなものなのか。これを『三人法師』の場合と同じように、近代読者のリアリズム重視の立場からの思い込み

ととらえ、解釈からは排除すればよいのか。それとも、このような印象が繰り返し強調されるのは、この作品の叙述そのものがそのようなモデル読者の成立要素を内包しているからだ、と考えるべきなのか。

一方で、この作品からは実に多様な、相対立する読みが引き出されている。周知の通り、綱吉の孝行奨励策への批判を強調する野間光辰氏（注5）、文字通りの孝道奨励の姿勢を重視する横山重・小野晋氏の説（注6）、そしてこの両者を止揚しようとした谷脇氏の「戯作」説、という三分類を基調とした研究史の整理はスタンダードなものとなっている。しかしながら、谷脇氏自身の論文の中で整理され提示されたこの三分類自体が、氏の論点にとつて戦略的に有効なものであったと同時に、後述するように、ある程度の恣意性を持つものであったように思われる。少なくともこの作品の研究史を丁寧に戻したとき、多くの研究者が悪戦苦闘してきた主要な要素は、先のような三分類に整理できるものの外にあった―すなわち、この三分類によって見えなくなってしまうところに問題点があった、ということができる。本稿において改めて研究史の詳細をふりかえるのは、以上のことをふまえつつ、近代の研究者がおこなってきた『本朝二十不孝』を読むという行為がいかなるものであったか、その総体をふりかえってみたいと考えたからである。

一、戦前の『本朝二十不孝』研究

片岡良一の『本朝二十不孝』評

片岡良一は、明治大正期の西鶴研究の総決算ともいえるべき『井原西鶴』（注7）を大正十五年三月に至文堂より刊行した。その第四章「浮世草子作者としての西鶴」の中で『本朝二十不孝』について言及しているのだが、そこには、片岡氏自身の屈折した思いと苦悩とが感じられる。

まず片岡氏は、好色物を書いてきた作家が不孝というテーマに至るのは、好色生活→極道→親不孝という「平凡な思考の屈折」であり、『二十四孝』を逆転させるというのも「浅薄な知的興味」だとする。そして、孝不孝という道徳の問題に触れようとした結果、やむをえず真面目な教戒や天の配剤などの観念を取り入れる結果となった、などと執筆動機を否定的な筆致で説明している。だが、氏が強調したかったのは、そのような動機ではない。

恐らくは作者の、常にでたらめな飛躍をあえてする連想の方向と、貧弱極まる思考力とのゆえに、本書は作者の最初の意図を裏切つて、単なる不孝者の咄という以上に、人間の悪を描こうとするものになってしまった。と同時に教訓という意味にも合致しない単なる因果譚や、神怪譚系統のものや、さては敵討説話などさえ雑然と収められてしまっ

た。

そのような、西鶴の散漫ともいうべき性格によつてもたらされた副産物の一つ「悪の描写」こそが、氏が高く評価するものであつた。巻一の一「今の都も世は借物」を例に次のように述べる。

作者が彼を描くに当つて示した態度は、ただ人間の悪の底まで見究めようとする態度であつた。浮薄な誇張や空疎な悪ふざけとは違う。ただぐんぐんと底を究めるのであつた。これでもか、これでもか、という態度であつた。

基本的には、志賀直哉の『暗夜行路』で示されたものと同じリアリズムを基調とした読み方だが、そのことの是非は今は何問わない。問題にしたいのは、この回りくとい評価の仕方である。「当初の」テーマであつた孝不孝の問題を極めて矮小化してとらえ、徹底した人間観照は元来西鶴の意図したものではなかつたという前提に立ちながら、それを高く評価するその述べ方である。

観照と教訓

徹底した人間観照を行なう西鶴は、単純な因果応報の理など認めず、「悪を突き抜けた彼岸の世界に絶対不可侵の天の支配を感じる」ようになっていたのだと片岡氏はいふ。世に善人が稀で悪人が多いことを序文に西鶴は記しているし、善人が必ずしも幸福にならない展開の話も少なくない。そのようなものを

書き綴つたのは、「人間はただ不可抗の変転の前に謙虚に合掌するより他はない」という心情を西鶴が抱いていたからだと思する。

周知の通り、片岡氏の『井原西鶴』は、『好色一代男』で性欲と恋愛の真相を情熱的に追究した西鶴が、作家的成長を遂げた後に、晩年には『西鶴置土産』の枯れた観照の世界へ至る、という作家としての軌跡を骨格としている。その中で重要な役割を果たす観照的態度—リアリズムの形成は、老荘思想による無常観の所産として説明されている。それゆえに、当時においても西鶴作が疑問視されていた『近代艶隠者』をあえて西鶴作とみなし、老荘思想と西鶴の結びつきを強調しようとさえしている。ならば、『本朝二十不孝』における「悪」をどこまでも冷徹に描写する姿勢は極めて好都合であつたはずである。なのに、なぜ素直に評価できないのか。それにはそれなりの理由があつた。

たとえば片岡氏は、一方で『本朝二十不孝』の中に因果譚とも見なし得る章がふくまれていることに注目する。巻二の三「人はしれぬ国の土仏」は、親に背いて船出した藤助が漂流の末に瀬戸で地獄の責めに合うというものだが、そこでは「此藤助が身の難儀は皆親の言葉を背きし罰ならん」と因果の理が説かれている。同様の記述は他の章にも散見するのだが、片岡氏は、これは「彼自身の気持ちを非常に浅く誤訳した」ものであると述べる。つまり西鶴は本心を裏切つて書いてしまった、

というのである。

また、『本朝二十不孝』に教訓的言辭が含まれていることも言及し、それを無視して読んではならないが、決してこの作品にとつて第一義のものではない、とする。教訓は、西鶴が現実と向き合い、「世俗の調和を紊すまいとする態度」の表れである。それは西鶴の真面目で重苦しい態度の表れである一方、世俗に墮した姿でもあつた、というのである。

片岡氏の意識の中では、どこまでも現実に無心で向き合い觀照し続ける西鶴という作者像が中心に据えられている。しかし、同時に片岡氏は、『本朝二十不孝』の記述の中に、仏教的因果律や世俗的教訓との妥協をも見出してしまふ。あるべき西鶴像と叙述の事態との間で苦惱する片岡良一という読者がここにはいる。彼は自分のその苦惱を作者西鶴のものにすりかえていると言えるかもしれない。ともあれ、『本朝二十不孝』という作品は、作家としての西鶴の「危機」―世俗との妥協―を示すものとして扱われているのである。

近代的文芸觀と『本朝二十不孝』

しかしながら、戦前期の西鶴研究においては、片岡氏のようなとらえ方は決して一般的なものではなかった。リアリズムと教訓・因果律の共存は、さほど違和感なく受け入れられていたといつてよい。

たとえば山口剛氏は、

勸懲の意を寓するに似てゐる。しかし、必ずしもさうでない。作者の感興は、むしろ不孝者の行為に存するやうである。といつて、不孝不徳を礼讃するのではない。その罪を除し来り除し去つて淡々たるものがある。また二十四孝を翻して二十四孝と題することに、別に世の徳徳を揶揄した念もない。しかし、とにかく序文に於いて標榜した勸懲の態度は、その一端にせよ、書中に示す必要があつたらう。

(注8)

と述べている。また、穎原退蔵氏も次のように述べている。

標題の示す如く不孝者の説話二十条を集録したもので、特に「本朝」と題したのは支那の「二十四孝」に對したのである。而して自ら序文に言つて居る通り、それらの話は明かに教訓の意を寓したものはあるが、それは仮名草子の教訓的態度や馬琴等の勸懲主義とは、その本質を全く異にするものであつた。要するに西鶴はこゝで人世に於ける悪の一面を、最も強く深く描き出したのである。(注9)

これらにおいては、觀照リアリズムと教訓との同居が違和感をもつて語られることがない。あたかも両者は適度のバランスを保つて配されているものごとくである。元禄時代に成立した文学として多少の教訓性が含まれていることは当然のこととし、むしろその教訓臭が、近世後期の戯作等よりも露骨でないことを評価している。江戸戯作の否定の上に成り立つ逍遙以來の文芸觀を背景とし、写実と教訓の度合いを測りつつ述べて

いるように思われる。

瀧田貞治氏もまた、教訓性を指摘しつつも、それは「当世一般の持った倫理的批判をも映した」にすぎないとし、作者の重点は「説話の持つ面白さ」にあるとする。ただし、やや「誇張的に戯画化された超人的無性格者が作中に跳梁」するような二三の章には、もはや「文芸」としての資格を失いかねない「危機」が見られるとする。そして、その「詩才」ゆえに「文芸」に踏みとどまった西鶴と、それができなかった八文字屋本の作家とを対照させている（注10）。

片岡氏は、作品の向う側にあくまで統一された一個の人格を見出そうとしていた。それゆえに作品内の「矛盾」がかえって強く意識され、作者の散漫と分裂とが語られるという形となった。老荘思想を背景として説明しようとしてはいるものの、逸脱を許さず完結性を求めること自体極めて近代的な発想であったといえるだろう。一方、八文字屋本や馬琴の読本を視野に入れて文学史的評価を考えた山口、頼原、瀧田氏らにあつては、その教訓性はさして気にはならず、むしろどれだけ写実的描写が垣間見られるかが重要であった。したがって片岡氏が問題にするような「矛盾」が顕在化してくることはなかったことであるが、これもまた近代的な文芸観を基盤とした発想であったことはいうまでもない。

二、分裂への注目―昭和二十、三十年代

「反封建」の視座から

片岡氏が『井原西鶴』で指摘したような『本朝二十不孝』の問題点―その分裂・矛盾は、戦後になって注目されるようになる。ただし、そのあり方は、片岡氏のように、老荘的無常観を西鶴作品に見出そうとする発想とは、異なつた背景を有していた。

田崎治泰氏は、『好色一代男』を輝かしい「近世的リアリズム」の確立としてとらえ、それに対して『本朝二十不孝』には「封建制度との妥協」「中世的なものへの回帰」といった危険性が内包されていると指摘する（注11）。

田崎氏によれば、西鶴は序文において、町人の立場から反「二十四孝」の表明を行つてはいるものの、「孝にす、むる一助ならんかし」と教訓的な因果物の形式で結ばれており、分限意識と結びついた封建的な常識が示されているにすぎないとする。しかしながら、各章の内容は、その形式をはみ出しながら展開し、「合理・非合理の混在する当代町人の世界観の実相」を描き出し、「町人の現実主義」を示したところに積極的な評価が可能だとする。

とはいふものの、その作品全体に対する評価は否定的なものである。奇談集的な性格が随所に見られ、封建的な宗教とも安

易に妥協している。また、女性が登場する章では、封建的な女性道徳観が支配している。善悪や孝不孝が対立する章では両者が類型的に描かれ、微妙な心の陰影が記されることがない。つまり、『本朝二十不孝』での西鶴は、中世的な仏教の因果の世界や封建的な価値観からぬけだすことかできなかったとする。

このように、田崎氏の読みの背景には、反封建的なるもの、人間性解放への希求が感じられる。そのような文学観に立つからこそ、『本朝二十不孝』の中に散見する教訓性や因果律は、許しがたい旧思想の「残滓」として際立ってくることになる。これはもちろん、終戦民主主義の出発期ともいべき時期にこの論文が執筆されているということと深く結びついている。

同様のことは、暉峻康隆氏の『西鶴 評論と研究』（注12）についても言うことができる。

暉峻氏は、『本朝二十不孝』執筆の動機を綱吉の孝道奨励策や忠孝札などの思想的トピックに触発されたものととらえ、そもそもが町人の立場から孝道を肯定するために、「二十四孝」の文学伝統を否定しようとするものであった、としている。もとよりそこには、西鶴が『好色一代男』で見せたような上昇期上方町人のエネルギーや情熱は見出すことはできず、奇談に対する説話的興味や勧善懲悪的な因果律が支配している。評価できるのは、そういった基調ともいべきものから時折踏み出して、自由に人生を観照してみたり金銭の持つデモンニッシュな力

に注目したりしている部分であって、全体としては、文学的にすぐれているとはいえない、という評価を下している。

「擬装」される本音

反中世的、反封建的なものを西鶴に希求する姿勢は、このような形で『本朝二十不孝』の否定的評価にたどり着く。一面ではその観照―現実凝視の姿勢を評価しつつも、それは西鶴の意図からはずれたところに生じた副産物とみなされた。『本朝二十不孝』は教訓・因果と観照とが同居し、矛盾・分裂を内包する出来ない作品とみなされることになる。

ところが、水田潤氏の『『本朝二十不孝』その戯作性についての一考察』（注13）は、この矛盾・分裂に全く異なった意味を見出した。

水田氏は、従来の『本朝二十不孝』への評価が、政道礼讃や教訓性などを創作意識と結びつけている点を、皮相的なものとして退ける。そしてそれらは、出版書肆の要求にこたえての「擬装」にすぎない、という見解を提示した。

これまでの発想とは逆に、教訓性や因果律からはみ出るように書かれた部分こそが、作者西鶴が当初から意識していたものであり、世俗の諸悪を「不孝」に限定して普遍化すること、それも否定的なモチーフとしてではなく散文精神が貫かれたものにとらえている。

「擬装」された教訓性の影に見え隠れするのは何か。それは、

卷一の一「今の都も世は借物」や卷一の二「大節季にない袖の雨」であれば、繁栄の背後にある庶民の零細と困窮であり、卷一の三「跡の剥けたる煙入長持」や「親子五人仍書置如件」であれば町人社会の混乱と退廃であり、卷二の二「旅行の暮の僧にて候」であれば金銭の魔力等である。

この「擬装」という発想は、従来の観照と教訓との位置関係を逆転した発想であつたといえる。この水田氏の論文と直接的な関連はないが、野間光辰氏が「西鶴と西鶴以後」(注¹⁴)で示した見解も、つきつめればここにたどり着くのではないかと思われる。

周知の通り、野間氏は、西鶴がこの時期に親不孝というテーマを選んだ理由を、綱吉の孝道奨励策にたいする反発ととらえている。『二十不孝』に限らず、『好色一代男』そのものが綱吉の恐怖政治に対する危機感から執筆されたとする野間氏にあつては、このテーマの選択が単に幕政に迎合したものではありえなかつた。

西鶴はこの聖人君子面をぶらさげてゐる將軍の二重人格を、町の生活の中でちかちかとして鋭敏に嗅ぎつけ、むしろ反感を抱いてゐたのではなかつたかと思ふ。「天下様」に対する町人の反感や反撥は、よし痛切な実感であつたとしても、その自由な表現が許されなかつたこと、勿論である。だからこそ表面には「孝にす、むる一助ならんかし」と謳ひながら、孝道奨励とは逆行する親不孝咄を集めたのであ

る。それは決して、単なる趣向の突飛さ、説話の興味だけに止まるものではない。

野間氏は、『本朝二十不孝』の具体的内容については全く言及していない。ただ親不孝というテーマを取り上げたということだけについて述べているのである。当然のことながら、各章からどのようにして幕政への反発を読み取るのかという課題が残されていることとなる。もしもそれを追究するとなれば、やはり水田氏のように教訓的言辞や因果律に支配された展開を「擬装」としてとらえ、綱吉統治下の世の惨状をいかにリアルに描き出しているか、という形で説明に必然的になるのではないかと思われる。

いささか余談めいた言い方となるが、昭和二十年代の前半に書かれた田崎・暉峻両氏の論文には、反封建の立場に立ち、人間性を抑圧するものを批判していかなければならないという学者としての良心―情熱のようなものが背後にあるように思われる。この時期の特殊な解放感とでもいうべきものが、その読み姿勢に繁栄していたとは考えられないだろうか。それに対し、昭和二十年代末から三十年代にかけて書かれた水田氏・野間氏の両論文には、レッドパージ、再軍備化の進行など、次第に戦前への逆コースが懸念されつつあつた時期の、ある種の息苦しさを読み取れるとするのは穿ちすぎだろうか。本音が「擬装」されざるを得ない社会状況への注目は、研究者自身の持つ不安感の表出であるようにも思われる。

教訓書としての『本朝二十不孝』

保守化の進行は、一方では不安感と息苦しさをもたらすが、他方では「反封建」を声高に主張する義務感からの解放へとつながる。『本朝二十不孝』についても、ことさらに反封建的要素を探し出して評価する必要はなく、むしろ、幕府に対しての迎合や礼讃の姿勢が強調されていることを当然のこととして認めるべきではないか。勝手な推測かもしれないが、水田・野間氏とは対照的なものであるだけに、檜谷昭彦氏（注15）や、小野晋・横山重氏（注16）の論述からはそのような背景を感じ取ってしまう。

たとえば檜谷氏は、巻一の三「跡の剝たる嬬入長持」の末尾に据えられた「後夫を求むるなどするすゑぐの女の事」への批判は庶民の啓蒙教化に努める仮名草子作者同様の姿勢の現れであり、巻四の四「本に其人の面影」はお上の考えが庶民のそれとはいかに違い筋が通っているかを示したものだとする。また、「家業へ家滅ぶるも皆これ人の孝と不孝とにありける」（巻二の四「親子五人仍書置如件」は西鶴の本音から出た言葉であり、不孝話の舞台として江戸を避けていることから、幕府の孝道奨励策を無視したり否定したりすることができない作者の執筆態度が読み取れるとする。

もちろん檜谷氏も、『本朝二十不孝』が教訓性を越えた鋭い形象や文学的な現実感を与えてくれることを認めてはいる。ただしそれは、西鶴本来の写実精神のために西鶴の意図は関わら

ずに描き出してしまった「皮肉な実相」であった、とする。

小野晋・横山重氏もまた、教訓者西鶴の姿勢を強く読み取っている。

そこには、当代の政治に対する、彼の反感や反撥の気持ちは、全く感じることができない。むしろ「永代、松の朶を鳴さず。此御時、江戸に安住」する悦びをのべておりまた「豊なる御代の例」を讀んでいる。これらは、常套の文飾であるかも知れないけれども、君恩を謝し、君徳を謳歌することに、彼等は生活感情としても訓致されていた。だから西鶴を、そう言った意味での、革新的な文学者とすることはできない。しかも、その教訓的態度は、決して単なる身振りではなかった。

このように西鶴の執筆態度を規定した上で、西鶴と仮名草子作者とを区別するものは、社会や時勢を現実的に描く写実的態度であったとする。ただしそれは、志貫徹哉が感得したような近代小説のリアリズムとは異なる。微妙な心の陰影を宿すような人物を描き得なかつたのは説話文学の特性を脱却できなかったからであり、人間の否定的側面を述べるのに誇張と諧謔とを加えるのは、慰み草としての浮世草子作者の本領を示している、と述べている。

三、『本朝二十不孝』の方法

孝行・不孝説話との関わり

つまるところ、以上述べてきた見解は、すべて、『本朝二十不孝』には教訓的要素とそこには収まらない写実的描写が共存しており、後者に西鶴のオリジナリティがあるとするにとどまる。異なるのは、この両者のバランスと作者の関係である。教訓的意識を強固に持っていないながら、西鶴の筆致ははからずも世の現実を描き出してしまったというもの。現実暴露そのものの方に執筆意図があり、教訓はその「擬装」であるとすることも。あるいはその中間にあつて、教訓性と現実観照の間で揺れ動く作家としての危機にあつたとするもの。

ここまで印象が異なってしまうのは、やはり未だ十分な作品分析がなされず、印象批評的な評論が中心の段階にあつたことにも由来する部分があるといえるだろう。すなわち、各自が想定するところの、作家西鶴の『好色一代男』以来の軌跡がまずあり、そこから作品の理解が導き出される。幕政に従順な一町人ととるか、反体制的な文化人ととらえるか、作風を模索して苦悩する創作者ととるか、そういった各自のイメージに左右されながら、『本朝二十不孝』の各章が要約されたり、あるいはその一部が引用されたりして、あらかじめ用意された作者像にふさわしい作品評価が形成されて行く。大雑把にまとめてしま

うならば、そのように言うことができるだろう。一見一致しているように見える「写実」に対する評価にしても、徹底したりアリズムという理解もあれば、誇張・諧謔を特色とするものまで多様である。

となれば次の段階として、作者像を一端捨象し、典拠研究や手法の客観的分析を通して作品の実相に迫れないだろうか、という動きが出てくることとなる。

徳田進氏の『孝子説話集の研究 近世篇—二十四孝を中心に—』^{〔注17〕} 中での言及は、この後盛んになる典拠研究の本格的なものへの嚆矢といってよいだろう。『本朝二十不孝』の各章について網羅的に、『二十四孝』の逆設定になっているもの、著名不孝譚の翻案と思われるもの、在来著名孝子譚に取材したもの等の指摘を行っている。それらをふまえて、西鶴は「道義的な立場のみから表現する伝統を打破し、醜悪な現実の中にひそむ真実を追究し文学化」し、そこに「散文のリアリズム」が確立しているとした。教訓的言辭はもちろんあるが、むしろ人倫を外れる人間の正体を人間性の一部と見てあくなき追究を行ったもので、不孝者を描くことは同時に社会批評にもなり得ているとする。

社会批評的な側面を強調して、積極的な評価を提示しているところは、先の水田・野間氏の論調とも通じるところのある結論だといえる。ただし、個々の章ごとの翻案・改作の方法について具体的な分析がなされているわけではない。同時代に読ま

れた多様な孝子・不孝説話群の中に『本朝二十不孝』を据えてその特質を捉えなおすことの可能性の端緒を示すにとどまっている。

方法の破綻

一方、江本裕氏は、『本朝二十不孝』における矛盾・分裂の問題を、西鶴の創作方法という観点から論じ、徳田氏とは対照的に否定的な評価を下している（注18）。

江本氏は、まず序文に二つの性格が表れていることを指摘する。一つは「不孝」というテーマによって統一された教訓への志向であり、いま一つは、従来の孝行譚への反抗と否定である。教訓への志向は西鶴なりの倫理を示そうという姿勢であり、孝行譚への反抗は倫理を蹂躪し破壊する人の姿を描き出すことを目指すものである。この明かに二律背反なことを、西鶴は作品上にどう形象しているのか。

たとえば、巻二の三「旅行の暮の僧にて候」は首尾一貫した不孝物語としてまとめられており、その悪の行動描写は徹底したものである。その他の章でも、物欲や虚栄に踊らされる人間の姿が描かれ、その現実認識の深さに驚かされる。ところが、唐突に教訓的言辞が付加されて安易な結末が述べられることもまた少なくない。小説を一篇の統一体とみるならば完全に破綻しており、この作品の物足りなさとなっているとする。

要するに、抽象的観念的な孝道は否定したものの、中世説話

や仮名草子などの従来の方法をそのまま使って二律背反的なものを志向したために、方法上の破綻をまねいたのではないか、ということである。

教訓とリアリズムという相反する要素の共存を、作者の思想の問題からある程度距離を置いてとらえ、作品の実体を方法の問題として分析しようとしたものではあるが、結論的には片岡―田崎・暉峻といった先行研究の延長上にあるといつてよいだろう。

以上述べてきた通り、『本朝二十不孝』という作品については、常に矛盾・分裂・破綻といったことがらが問題となってきた。人間の欲望や社会悪の徹底的な描写―観照的態度あるいはリアリズムと、仮名草子的な教訓的言辞やありきたりな因果律による支配。この間で研究者は苦悩してきたといつてよい。おおむねそれは危機や破綻といった否定的評価へと傾く傾向を持ち、積極的評価を試みようとするれば、教訓的言辞を「擬装」として処理するほかはなかった。

ところが、谷脇理史氏の「『本朝二十不孝』論序説」（注19）では、この分裂や矛盾といった性格がほとんど問題にされていない。以後の『本朝二十不孝』研究に大きな影響力を持つこの論文がどのように作品と向かい合っているのか。このことは次の機会に言及することにする。

(注1) 暉峻康隆『西鶴 研究と評論 上』中央公論社・昭和二年

(注2) 野間光辰「西鶴と西鶴以後」『岩波講座 日本文学史』卷十近世昭和三四年

(注3) 谷脇理史「咄の咄らしさ―西鶴の語り口をめぐる―」益田勝美・松田修編『日本の説話5 近世』東京美術・昭和五十年

(注4) 谷脇理史「『本朝二十不孝』論序説」『国文学研究』昭和四十二年十月

(注5) 注2と同。

(注6) 小野晋・横山重 岩波文庫『本朝二十不孝』解説・昭和三八年

(注7) 片岡良一『井原西鶴』の本文は『片岡良一著作集』第一卷(中央公論社・昭和五四年)によった。

(注8) 山口剛 日本名著全集『西鶴名作集 下』解説 日本名著全集刊行会・昭和四年

(注9) 額原退蔵「日本文学書目解説(五) 上方・江戸時代(上)」『岩波講座日本文学』第十六回配本・昭和七年

(注10) 瀧田貞治「『二十不孝』の持つ教訓性と西鶴作品の持つ危機に就いて」『西鶴襍稿』野田書房 昭和十六年

(注11) 田崎治泰「本朝二十不孝について」『文学』昭和二十一年十月号

(注12) 注1と同。

(注13) 水田潤「『本朝二十不孝』その戯作性についての一考察」『立命館文学』一〇八・昭和二十九年五月

(注14) 注2と同。

(注15) 檜谷昭彦「本朝二十不孝」『国文学解釈と鑑賞』昭和三十五年十月号

(注16) 注6と同。

(注17) 徳田進『孝子説話集の研究 近世篇―二十四孝を中心に―』井上書房・昭和三八年

(注18) 江本裕「『本朝二十不孝』―方法の破綻について」『芸と批評』八・昭和四十年六月

(注19) 注4と同。

(うどう ゆたか)